

2025 C

国語

注 意

1. 試験開始の合図があるまでに、この注意をよく読んで間違いのないようにして下さい。
2. 試験開始の合図があるまで、冊子を開かないで下さい。
3. この冊子には、問題 12 ページ、解答用紙 1 枚がセットになっています。
4. 試験開始の合図がされたら、問題のページ数と解答用紙を確認し、解答用紙をミシン目で折ってから冊子よりていねいに切り離し、解答用紙に受験番号を記入して下さい。
5. 問題・解答用紙に落丁、乱丁、印刷不鮮明などの個所がある場合は申し出て下さい。
6. 解答は必ず解答用紙の所定の場所に記入して下さい。
7. 解答用紙は**HBの黒鉛筆**(シャープペンシル可)で記入することになっています。HBの黒鉛筆、消しゴムを忘れた人は申し出て下さい。
8. 文字ははっきり書いて下さい。解答の文字が読みにくい場合は、点を与えないことがあります。
9. 解答用紙の評点欄には何も記入してはいけません。

問題は次のページより始まります。

私がまだ幼稚園児だったころの出来事だと思う。近所の小学校で開かれた水泳の体験教室に姉と一緒に参加させられた。初めて間近に見た二五メートルプールは、その縁から眺めるととても深そうに見えた。足がつかないんじゃないかと思って水に入るのが怖く感じられた。先に入った姉もつま先でトントンと跳ねていないと顔を水の外に出せないらしい。姉より身長低い私が入れば頭のとっぺんまで水に浸かってしまうだろう。足がつかないのが怖くて、階段からおそるおそる水に入って、縁にしがみついた。

ただ、いちど水に慣れてしまえば気持ちがよかった。水面に顔をつける練習をして、縁につかまりながら浮かぶ練習をした。息を止めて水に顔をつけると全身に力が入ってしまう。それに、足がつかないと思うと怖くてなかなかヒザ^aを伸ばせない。恐怖心をおさえて何度か試してみるうちに、うまく力が抜けて全身を水にまかせられる瞬間が訪れた。ふわっと身体が宙に浮いているような感じがしてなんとも気持ちがいい。水に浮かんでいるこの感じをもういちど味わいたくて、こんどは息が続くぎりぎりまで同じ状態を保ってみた。これを何度か繰り返しているうちに、自分の体が水とひとつになったような感じがした。浮かぶことに夢中になっているうちに、最初感じていた怖さをすっかり忘れていた。

これは私自身の運動学習のひとつまを振り返ってみたものだが、話を水泳に限らなければ読者にも似たような経験があるだろう。運動学習といっても対象は水泳やその他のスポーツに限られるわけではなく、楽器の演奏、ダンス、自動車の運転、料理、サイホウ、ビデオゲームなど、練習を通じてパフォーマンスが向上する場面は理論的にはすべて運動学習として位置づけられる。

A、誰もが何らかの運動学習を日常生活のさまざまな場面で経験していると言えるのである。運動学習は一般に、練習を続けるうちに「コツをつかむ」経験が生じ、それ以前は難しく感じられた動作がスムーズにできるようになる段階を経て進んでいく。コツをつかみ、以前はできなかったことができるようになると、「身体がおぼえている」^①「身体が知っている」という状態が実現する。心理学ではこの状態を、身体運動の手順が記憶として定着した状態とみなして「手続き的記憶」と呼んでいる。

そもそも、歩く、走る、つかむ、投げる、座る、といった日常の基本動作でさえ誕生時の私たちには不可能であって、乳幼

児期の長期の運動学習によって初めて可能になる。運動に関連する脳領域で^{注1}卒中が生じた後では、歩く、物をつかむといった生活に不可欠な動作でさえ滑らかに遂行することが難しくなる(ちなみに、認知神経リハビリテーションの提唱者カルロ・ペルフェッティによると、脳損傷からの回復過程の本質もまた運動学習である)。そう考えれば、運動学習が私たちの生活全体に大きな影響を及ぼしており、「生きられた身体」を考えるうえで基礎的な重要性を帯びていることは明らかだろう。「中略」

現象学では、三人称的な観点から物体としてとらえられる身体とは区別して、一人称の「私」の観点から経験されている身体としての身体という含意がある。^{注2}モーリス・メルローポンティが『知覚の現象学』において展開している通り、生きられた身体は何よりもまず、行為と知覚の主体として経験されている。しかもその身体は、通常の行為や知覚においてはメイリョウに意識されることがなく、むしろ行為や知覚の対象を浮かび上げる当のものとして作用している。たとえば、ペンを使ってメモを取っているときに手首や指先の動きが気になることはあまりないだろうし、絵画を見ているとき、それを見ている眼球の動きは意識にのぼらないだろう。メルローポンティもこのように述べている。

世界を見たり世界に触れたりしている限り、そのゆえに私の身体は見られることもできなければ触れられることもできない。私の身体が決して対象になることがなく、決して「完全に構成される」こともないのは、^③それによって対象が存在するところの何かだからである。

私が生きているこの身体がなければ、いかなる行為も知覚も可能にはならない。にもかかわらず、行為や知覚を遂行している最中、その身体は経験の背景に退いてしまっており、経験の前景として焦点化されるのは、行為の対象であるペンや紙、知覚の対象である絵画、あるいはそうした対象の総体としての環境である。身体は、そこからあらゆる知覚が生じるパースペクティヴの原点であり、それを通じてあらゆる行為がなされる原点である。私の身体はむしろ、

B

ことで、環境を出現

させ、その中の特定の部分を行為や知覚の対象として浮かび上がらせる。その意味で、メルロ＝ポンティが指摘しているように、私の身体は「それによって対象が存在するところの何か」であって、それ自体が対象になって現れることはない。生きられた身体は、いわば「不在の身体」である。

ただし、もちろん次のような場合には、身体は対象として経験のなかに現れてくる。私が私の身体を知覚する場合、あるいは私の身体を対象として行為する場合である。指先のささくれを取り除くような場面では、私は自分の指先をじっと見つめながら、引き抜くようなしかたで一氣に剥がそうとする（医学的にはこういう対処は勧められないが）。このとき、私にとって自己の身体はまさに C。ただし、このようなしかたで自己の身体が対象として経験される場合も、身体のすべてが対象

になって現れてくることはない。先の引用で、自己の身体は「完全に構成される」こともない」とカギ括弧が付されている箇所はメルロ＝ポンティによるフッサールの引用^{注3}なのだが、その引用元でフッサールはこう述べている——「あらゆる知覚の手段として私に役立つその同じ身体が、それ自身を知覚するときには私には邪魔になるのであり、奇妙にも完全に構成されることのない事物である」。私は自分の胴体や手足を見ることができても、頭や背中を見ることができない。身体は対象になることはあっても、その全体を外側から見ることができないし、物体にはたつきかけるように全身を外側から操作することもできない。知覚と行為の原点としての性質が残る限り、自己の身体が対象として完全な姿で現れることはないのである。

また、自己の身体が経験において前景化して現れてくるとき、身体を取り巻く環境の側が背景として隠れてしまうことに留意しておこう。頭が痛いときや歯が痛いときは、身体内部の特定の部位に生じている痛みの感覚に気を取られてしまい、他人の話が上の空でしか聞こえてこなかったり、本を読もうとしてもまったく文字を追えなくなってしまう。私たちが何かを経験するとき、身体と環境とのあいだにはいわゆる「図と地⁴」の関係があつて、環境が図として前景化して現れてくるときは身体が地として背景化し、逆に身体が図として現れてくるときには環境のほう背景化するのである。

（田中彰吾『自己と他者 身体のパースペクティブから』）

注1 卒中Ⅱ脳の血管に障害が起こり、急激な症状を発作的におこすこと。

注2 モーリス・メルロ＝ポンティⅡフランスの哲学者（一九〇八～一九六二）。独自の現象学的哲学を展開した。

注3 フッサールⅡエドムント・フッサール。ドイツの哲学者（一八五九～一九三八）。現象学の創始者。

問一 空欄AⅡCに入る最も適当なものを次のイⅡニからそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。

A

イ 特に ロ 一方で ハ 具体的には ニ なので

B

イ 経験の前景から消え去って透明になる

ロ 主体としての自己をさらに先鋭化する

ハ 対象と自分自身とを同一のものとみなす

ニ 自己を極限まで対象化してとらえる

C

イ 知覚経験を原型として連続するイメージの広がりである

ロ 知覚の対象であり、行為の対象でもある

ハ 経験と知覚の狭間でそれらを媒介する中間点となる

ニ 感覚を超越した高次の主体として働く

問二 傍線①「手続き的記憶」とはどういうことか。問題文の筆者の幼稚園児のころの体験を例にとりながら、六〇字以内で具体的に説明しなさい。

問三 傍線②「運動学習が私たちの生活全体に大きな影響を及ぼしており、「生きられた身体」を考えるうえで基礎的な重要性を帯びていることは明らかだろう」とあるが、運動学習が「生きられた身体」を考えるうえで重要であるのはなぜか。問題文の趣旨にそって七〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線③「それによって対象が存在するところの何か」と同じ内容を言い表している箇所を、問題文中の傍線③以降から二五字以内で抜き出しなさい。

問五 傍線④「図と地」とあるが、「図と地」の「図」とはどのようなものか。問題文の趣旨にそって三五字以内で説明しなさい。

問六 次のイ～ニについて、問題文の趣旨に合っていれば○を、合っていなければ×をそれぞれ書きなさい。

イ 筆者の幼稚園児のころの経験が語るように、恐怖をのりこえることによって何かを体得することが運動学習の本質である。

ロ 運動に関わる脳領域で卒中を起こした患者がリハビリテーションをおこなうのは、運動学習をあらためて経験することを意味する。

ハ 自己の身体が全体としては知覚の対象になりえないという点で、メルロ＝ポンティとフッサールは同じ見方である。

ニ 視覚対象の観察に集中するあまりに自分自身の眼球の動きが気になるのは、前景と背景が反転する作用の表れである。

問七 波線 a～c の片仮名を漢字(楷書)で書きなさい。

二

生物を分類するとは、どういうことであろうか。なぜ私たちは「生物を分ける」必要があるのだろうか。まず、ここから考えていこう。

この非常にシンプルな命題に答えるためには、まず「ものを分ける」ということについて考えなくてはならない。とても根源的な、人間の、動物の本能ともいえる行動だが、真剣に向き合った経験はどれほどありだろうか。

たとえば目の前に、茶色いアメリカンフットボールとバスケットボールが1つずつ転がっていたとする。「これは同じ種類のボールですか？」と聞かれれば、あなたはどうか答えるだろうか？ 普通はすぐに「別の種類です」と答えられるだろう。円形と楕円形という違いはもちろん、中身の構造とそれに伴う弾力性の違いなど、さまざまな特徴をもって、あなたはそれらを別種と判定するはずだ。

しかし、じつはその判定は、あなたが事前にそのこと——2つのボールが別種であること——を知っているからこそ為せるのだということにお気づきだろうか？

アメフトやバスケットのプレイ経験の有無にかかわらず、今あなたはきっと、これまでに観たそれらのスポーツの試合を無意識に思い返し、目の前の2つのボールを「分けて」いる。目の前の物体だけでなく、過去に見てきたいくつものボールを頭思い浮かべて、それらを種類分けしているはずである。

というより、そういう過程を経ないと、目の前の物体を2種類に分けることができない。もしあなたが生まれて初めてアメフトとバスケットのボールを見たとして、その2つが別種であると判断できないのである。

想像してみてもほしい。目の前の2つのボールが初めて見るものであれば、その種別を判断するために、あなたは当然、それらをつぶさに観察するだろう。たしかに形は違う。重さも弾力も違うように感じる。しかし、色は茶色で似ているし、一応どちらも(楕)円形である。

悩みに悩んだ挙句、あなたは、この状況ではどうしてもそれらが別の種類であると判断できないことに気づくだろう。なぜならば、

「もしかすると、この中間の形もあるのでは……？」

この疑問をどうしても払拭^②できないからだ。目の前にあるのは、さまざまな形を持つある1種類のボールの、たまたま形の違う2つに過ぎないのかもしれない、と。もしくは、どちらかがボール造り職人のミスでたまたま楕円形になってしまったもの（生物学でいえば「奇形」なのだと思うかもしれない）。

ここまで聞いて、「何を屁理屈を」と思われるかもしれない。しかしこれは立派な理屈の話だ。ずっと突き詰めると、ものを分ける際には、「対象とするものが2つだけしかない状況では、それらをはつきりと分けることができない」という考えに行きつくはずなのである。このボールの例では、ここにもう一つバスケットボールが加わって3つになって初めて、2つのバスケットボールが同じ種類で、もう一つのアメフトボールと「分ける」ことができるようになる。

繰り返しになるが、私たちはバスケットボールやアメフトの試合の光景の中で、何度もバスケットボールやアメフトボールを目にしている。目の前にあるボールが2つだけであっても、そのような  の中から、別のボールの記憶を目の前の状況に加える、すなわち「分ける対象を頭の中で3つ以上にする」ことで、ボールの種別を判断しているのだ。

そして、ここで注目してほしいことがある。たとえばバスケットボールが新たに1つ加わったとき、私たちはバスケットボールとアメフトボールを「分けて」いるのだが、同時に2つのバスケットボールを「まとめて」いるということだ。「分ける」と「まとめる」ことは表裏一体で、分類とは、分けることでもあるが、ものをまとめることでもあるということがお分かりいただけよう。

一つ、私自身の分類学の現場での実体験を挙げよう。私が博士課程のとき、あるクモヒトデの標本Xに出会った。すぐにそれがヒメモヅル属というグループ（属は種の1つ上の分類のカテゴリー）に含まれることは分かったのだが、どうにもその種がすぐに分らない。

ヒメモヅル属にはその時点で3種が知られていて、そのうちの2種（A、Bとする）の情報は文献から確認でき、Xとは形態的に異なることが確認できた。クモヒトデ類は腕の側面に腕針^{わんしん}と呼ばれる棘を生やしているのだが、その数がXでは1本、A

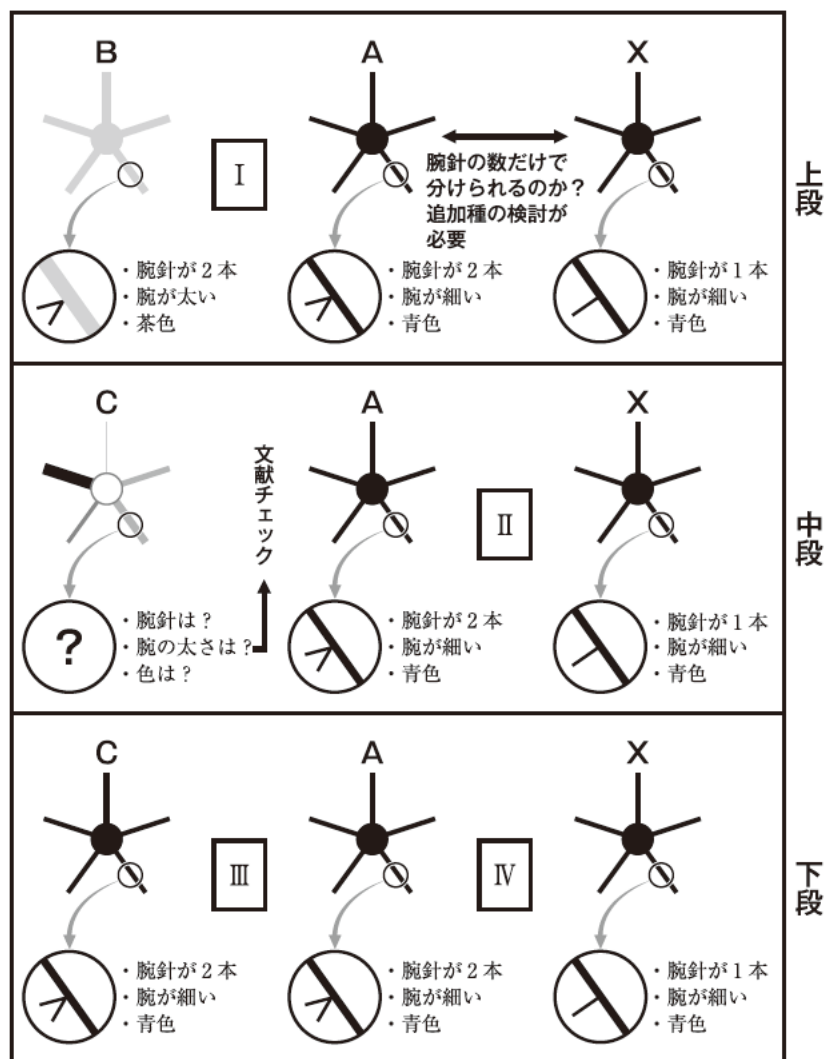


図 未知の標本Xをどうやって区別するか

とBでは2本なのである。

このうちBは、体色や腕の太さから、X、Aと分けることができた(図—上段)。が、XとAは腕針の数以外に際立って分けられる特徴がなかった。こうなってくると、残りの1種(Cとする)の腕針の数が問題となってくる。XとAは腕針の数で分けられるが、もしCの腕針が1本であれば、CとXの関係について再考しなくてはならない(図—中段)。

もちろん他にもこれらの種を区別するための細かい特徴はいくつかあるのだが、腕針のような数えることのできる特徴は、非常に扱いやすい。したがって、このCの特徴、とくに腕針の数がもし2本以上であれば、私の手元のXと明確に分けることができ、Xはキチのいかなるヒメモヅル属の種とも異なる新種であると判断できる。これは重要な検討事項だった。

このCは、デンマークの生物学者 Theodor Mortensen(テオドル・モルテンセン)による1918年の論文で最初に新種

として発表されたもので、それ以降、まったく研究がおこなわれていなかった。Cについて調べるには、発表当時の論文を取り寄せて調べるしかないわけだが、発表されたのがかなりマイナーな海外の雑誌であったため、少なくとも国内の図書館には所蔵されていなかった。

「中略」このCに関する論文を、大学の図書館を通じて取り寄せてもらうことにした。

それから1週間ほど経ち、待ちに待った論文が海外から届いた。「中略」

まず、ページをめくって安堵した。英語である。モルテンセンは、クモヒトデを含む棘皮動物きんくひどうぶつというグループの④で、さまざまな言語で論文を発表していたため、まずは私でも辞書を引きながら解読ができる英語であることにほっとした。そしてページをめくると、さらにラッキーなことに、私の求めていた腕針の数を示すスケッチが、ばっちり③とケイサイけいさいされていたのである。

それを見た瞬間に、「よし！」と心中でガッツポーズを決めた。そこに示されたCの腕針の数は2本であった。つまり手元のXは、ヒメモズル属の中では今のところ唯一の、腕針を1本しか持たない種なのであった。少なくともこの特徴によって、他種と区別できる  であることが判明したのである。

ちなみに、このCとAを見比べてみた結果、これらはじつは形態的には区別できない同種であることも新しく分かった。

(図―下段)

つまり私はAとXという2つのもの(ここでは種)の区別に迷っていたが、これをはっきりと区別するために、情報のなかった3つ目のCの形を把握することによって、  ということになる。逆に言えば私は、Cの形を認識するまで、AとXの区別ができなかった。このように、ものを分けるときには3つ以上の要素が必要であり、分けることとまとめることは表裏一体であることがお分かりいただけただろうか。

(岡西政典『生物を分けると世界が分かる』)

注 問題文中の図は、出題のために、原著にある図にもとづいて作成した。

問一 二重傍線「対象とするものが2つだけしかない状況では、それらをはっきりと分けることができない」とあるが、その理由を問題文の趣旨にそって六〇字以内で書きなさい。

問二 傍線①～④の語句の問題文中での意味と、最も近い意味を持つ語句を次のイ～ニからそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|---------|---|-------|---|-------|---|------|
| ① | イ | にもかかわらず | ロ | だからこそ | ハ | 結果として | ニ | ともあれ |
| ② | イ | 通曉 | ロ | 再検討 | ハ | 消去 | ニ | 共有 |
| ③ | イ | 比較して | ロ | 分析的に | ハ | 総じて | ニ | 歴然と |
| ④ | イ | 成員 | ロ | 泰斗 | ハ | 著者 | ニ | 家主 |

問三 空欄①、②に入る最も適当な語を問題文中からそれぞれ漢字二字で抜き出しなさい。

問四 左の図(問題文中の図と同じもの)は未知の標本Xをどうやって区別するかについての問題文中の説明をまとめたものである。図中のⅠ～Ⅳには、標本AとB(Ⅰ)、XとA(ⅡおよびⅣ)、AとC(Ⅲ)を分けられるかどうかについての記述が入る。Ⅰ～Ⅳに入る最も適当なものを図の下に示したイ～ハからそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。同じ記号を複数回使ってもよい。

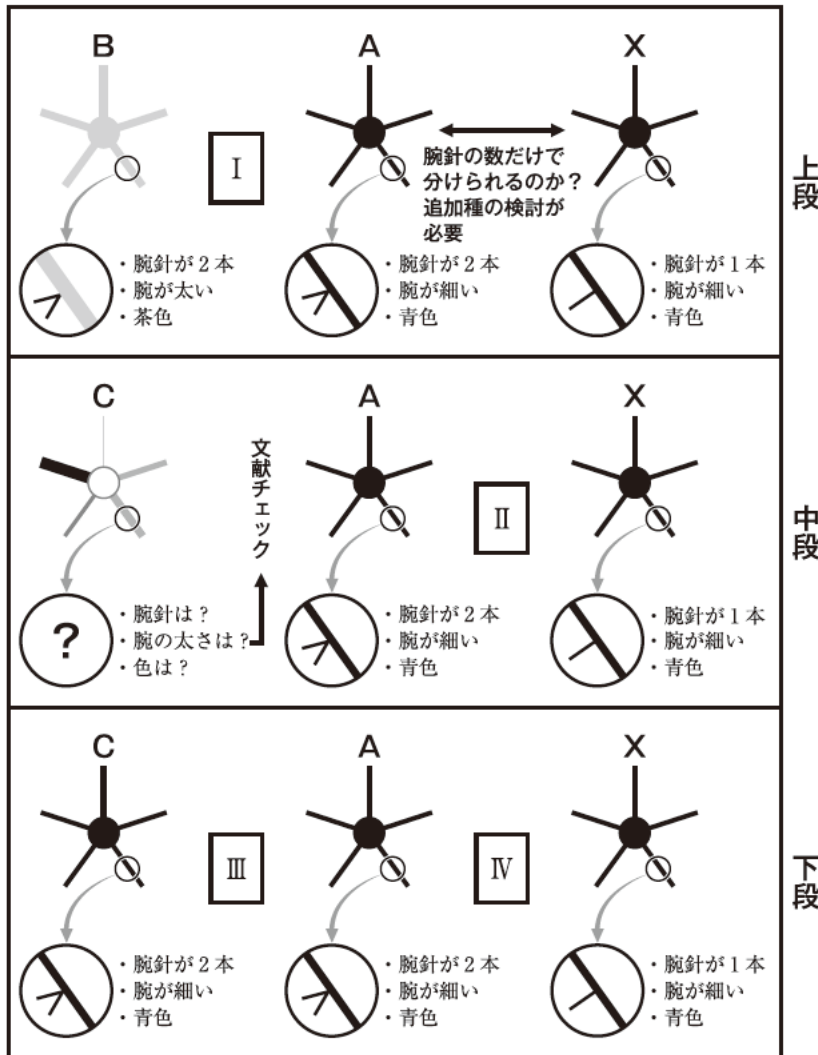
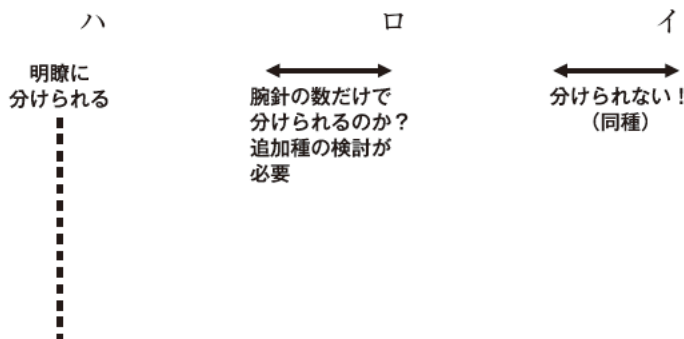


図 未知の標本Xをどうやって区別するか



問五 空欄③に入る最も適当なものを次のイ～ニから一つ選んで、その記号を書きなさい。

イ AとXを再度比較し、腕針数の一致から同じ種とした

ロ AとCをまとめて、Xと区別した

ハ AとCは同じ種、Xは別の属とした

ニ XはAと同じ種であるが、Xは偶然変異したと判断した

問六 波線a、cの片仮名を漢字(楷書)で書きなさい。また、波線bの漢字の読みを平仮名で書きなさい。